vinetur

スコットランドのウイスキー在庫量が14億リットルに達した

供給が需要を大きく上回ったことを受け、多くの蒸留所が生産量を3分の1以上削減した。

2026年9月7日（月）



フィナンシャル・タイムズ紙が、コマーシャル・スピリッツ・インテリジェンス社の推計および業界関係者への取材を引用して報じたところによると、2026年時点でスコットランドのウイスキー業界は、熟成中のウイスキーを推定14億リットル保有しており、これは約10年前の4億リットル未満から大幅に増加したものである。

報道されている在庫水準によると、スコットランド全土の倉庫には、10年前と比べて10億リットル以上のスピリッツが追加で保管されていることになる。これにより、現在の在庫量は以前の水準の少なくとも3.5倍に達することになる。また、この量は現在の消費量の約3年分に相当するとされて

おり、供給が需要を大きく上回っていることを示している。

こうした在庫の積み上がりにより、多くの蒸留所が生産を縮小せざるを得なくなっている。　同報道によると、販売に数年を要することのある在庫の増加を抑制しようと、多くの生産者が生産量を3分の1以上削減している。ウイスキー業界では、スピリッツは樽で熟成させてからでないと、スコッチとして瓶詰め・販売することができない。つまり、生産者は収益を上げるずっと前から資金を投じなければならないことが多い。

この長い熟成サイクルにより、供給過剰が深刻な財務問題へと発展する可能性がある。　大量の在庫は、数年は売れないかもしれない原酒に資本を拘束してしまう。需要が低迷し続けたり、成長が鈍化したりすれば、生産者は値引きや操業停止、資産売却、あるいは新たな資金調達を迫られることになる。このリスクは、広範な国際的な販売網を持つ大手グループに比べて資金繰りが厳しいことが多い独立系蒸留所にとって、特に深刻である。

最近の事例として、同レポートによると、エディンバラのホリールード蒸留所が今春、蒸留を無期限に停止したことが挙げられる。　同社は約4,500樽を保有しているとされる。蒸留の一時停止は、蒸留所がすべての事業活動を停止したことを必ずしも意味するわけではない。生産者は既存の在庫の熟成、販売、または販売を継続できるからだ。しかし、これは現在の市場状況が一部の事業者に資金の温存とさらなる生産の制限を余儀なくさせていることを示す明確な兆候である。

14億リットルという推計値は、スコッチ・ウイスキー協会の公式在庫データではありません。この数値は民間機関による分析に基づくものであり、ウイスキーのうち法定瓶詰め可能年齢に達している量、所有者、即座に販売可能な割合、あるいはその価値については詳細に分析されていません。また、蒸留所の規模、地域、所有形態ごとの詳細な内訳も示されていない。つまり、この総量は数量の概略を示すものではあるが、業界全体の商業的な健全性を完全に測る指標とはならない。

報告書で言及されている生産削減についても、単一の公開データセットではなく、業界筋の情報に基づいている。そのため、生産削減の影響がどの程度均等に及んでいるかを把握するのは難しい。生産量をやや削減しているメーカーもあれば、はるかに大幅な削減を行っている、あるいは一定期間生産を停止しているメーカーもあるだろう。　その影響は、各蒸留所の販売チャネル、輸出への依存度、契約上の義務、および資金繰りの状況によって異なる可能性が高い。

在庫が重要なのは、スコッチ・ウイスキーが短期的な需要の変動に応じて生産されるものではないためだ。蒸留所は、多くの場合、輸出市場における将来の消費見通しに基づいて、数年先を見据えて意思決定を行わなければならない。もしその見通しが過度に楽観的であった場合、短期的な販売の見通しが立たないまま、倉庫で熟成中のスピリッツが大量に滞留することになる。　熟成そのものが、保管、保険、樽の管理、資金調達を通じてコストを伴うため、在庫の増加は、ウイスキーが瓶詰め可能な熟成期間に達する前から、さらなる圧力を生じさせる可能性がある。

この問題は、価格競争の懸念も招く。一度に販売可能なウイスキーが過剰に供給されれば、生産者は在庫を処分するために利益率の引き下げを余儀なくされる可能性がある。このリスクは、買い手の交渉力が強く、独立系蒸留所がより大きな影響を受けやすい卸売市場やプライベートブランド市場において、特に重大なものとなり得る。　一方で、ブランド力が強い生産者は、在庫を長期にわたり保有することで価格を守ろうとする可能性があるが、それにより資本が拘束されることになる。

スコットランドにとって、熟成中のウイスキーの蓄積は単なる倉庫の統計以上の意味を持つ。スコッチは依然として同国で最も有名な工業製品の一つであり、生産に関する決定は、地方の雇用、樽職人、物流業者、穀物供給業者、ガラスメーカー、そして蒸留所に関連する観光事業に影響を及ぼす。熟成在庫が依然として高水準にあるとしても、蒸留業界全体での減速は、こうしたネットワーク全体に波及する可能性がある。

報告された数値は、長年の拡大を経て業界が調整局面に入っていることを示唆している。 4億リットル未満から約14億リットルへの増加は、蒸留所が長期間にわたり大量の原酒を貯蔵してきたことを示している。この戦略は成長期待が強かった当時は理にかなっていたが、現在の消費量が新たな供給を以前と同じペースで吸収しなくなった今、維持することが難しくなっている。

この推計値は貯蔵中のウイスキーに金銭的価値を割り当てていないため、個々の企業がどれほどの貸借対照表上の圧力に直面しているかは示されていない。 2つの蒸留所が同程度の在庫量を保有していても、負債水準、資金調達コスト、ブランド力、樽の熟成期間の構成によって、直面するリスクは大きく異なる。熟成期間の長いウイスキーは高値で取引できるが、それだけ資本が長期にわたり拘束されることになる。熟成期間の短い在庫は保守的に評価しやすい反面、熟成期間の長い製品のように即座に販売することはできない。

9月5日に報告された数値は、スコッチ・ウイスキー業界が抑制的な局面に入りつつあることを示す新たな証拠となっている。長年にわたり新規蒸留所の開設や既存メーカーの事業拡大が続いてきたが、現在は在庫管理、資金保全、そして市場が吸収できるスピリッツの量への注視へと焦点が移りつつあるようだ。